スウェーデン便り（９）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝2000 年 1 月 18 日

［本文］

首相に異変が起きた時に政治をつかさどる人、つまり副首相がヘリデンに来た。

ユーロ通貨への参加について、学生その他と意見を取り交わすためである。

受け入れのために掃除をしたり、飾りつけたりとかは全くなく、あまりに素っ気ない迎え方に驚いた。掃除は木曜の二時ごろからと決まっている。

副首相が来る一週間くらい前、学校のギャラリーに、カラフルなイラストが張り出された。いつものように、学生の作品だと思っていたが、それがユーロ通貨に関する政府のポスターだった。

会場は一番広い絵画教室で、そこでは、いつもヌードデッサンをしている。前の晩、学生のピーターが、そこで写真展とスライド上映会をやり、椅子（いす）が五十ほど並んでいたが、当日は、それに椅子が少し加わったことと、正面の机の両側に鉢植えが置かれたことが違っていた。

十時のカフェのあと、ゾロゾロと絵画教室に入ってゆくと、先生たちもあちこち、生徒に交ざって座っている。この学校は、年齢幅が広いので、知らない人は見分けがつかないだろう。イタリア語のクリスチーナ先生が、一分くらいの短いスピーチをして席に着くと、前列に座っていた中年の女の人が、前に出て話し始めた。その横で、手話通訳をしている。数人のカメラマンが写真を撮り始めた。

おだやかで、語りかけるような話しぶりである。演壇もなく、マイクもない。教室へ、いつ入って来たのかもわからない、さりげない現れ方で、ガードマンらしい人もいない。となりの人に聞くと、「首相だって、その辺の街の通りをリンゴをかじりながら歩いているよ。国王とかでない限り、特別なことはしないでしょう」と言う。王妃がドイツ人で六カ国語をしゃべり、手話も出来るという国なら、そういうことも有り得る。

しかし、壁全面に張りめぐらされた、インドやネパールの写真は、昨夜か今朝のうちに撤去するなんてことは、先生たちも考えなかったんだろうか？　むろん、ピーターは、張ったままにしておくべきだと思ったにちがいない。

彼女の話の内容は皆目わからなかったが、表情から察すると、どちらにしても見通しは容易ではない、と言っているようだ。

スピーチの後の質疑応答の活発なことには驚いた。顔見知りの仲間たちや先生が、次々と手をあげ質問する。彼女は立って、質問をした人に向かって丁寧

に答える。生徒たちは、最初こそ立って質問するが、彼女の応答に、座ったままで素早く次の質問を重ねてゆく。授業の時と同じで、納得するまで食いさがる。

欧州連合（ＥＵ）参加の際は、企業側のゴリ押しに、庶民側からの不満が残ったという話だが、合意のための徹底的対話が伝統とはいえ、政治家も楽ではない。よくしゃべる人たちである。冬場には、一日にわずかな時間しか陽（ひ）が差さず、終日、部屋の中に居れば、こういう国民性になるのだろうか。